

# VIEWPOINT 音楽

伊藤祐二 (作曲家)

## ユージ 芥に 気をつける

### ラフカディオ・ハーンプロジェクト

私とピアノリスト井上郷子による企画。今年六月に  
アイerlandで三公演、九月に東京で二公演、十月  
に松江で一公演を実施。日本、アイerlandの作曲  
家各二名が、ラフカディオ・ハーン（小泉八雲の  
テキストを選び、朗読+ピアノを前提に作曲か  
の地では英語、日本では翻訳での上演。（作曲家：  
ジョン・マクラクラン、ポール・ヘイズ、伊藤祐二、  
内藤明美、ピアノ：井上郷子、朗読：茨木啓子、ジ  
ョーン・マクラクラン）

まるで、ピエール・ロティの小説のよ  
うな出自なのだ。ハーンの父はアイラ  
ンド人の陸軍軍医。駐屯地ギリシアのレ  
フカス島で現地的女性と結婚、ハーンは  
生まれた。ダブリンでの生活の後、母は  
ギリシアに戻り、父は他の女性と再婚。  
十六歳の時の事故で左目を失明していた  
ハーンは、預けられていた大叔母の破産  
に伴い、すべてを失ってアメリカに送ら  
れた。一八六九年（明治七年）一九歳の  
時である。（どん底の生活、やがて新聞

記者として成功。）

この時期、ハーンは、ニューオーリン  
ズで黒人労働者の生活、言葉の研究し、  
（混血の黒人女性と同棲し、スキヤンダ  
ルとなったのもこの頃）、さらにフラン  
ス領西インド諸島のマルチニーク島に出  
かけて、クレオール語を採集している。  
（ポール・ゴーガンの滞在と同時期！）

例えば、パトリック・シヤモワゾー  
他が、「クレオール礼賛」を書いたのが  
一九八九年、遡つても、エメ・セゼール  
らのネグリチユード運動が、一九三〇年  
代からであることを考えると、クレオー  
ル語、文化に注目研究した一八〇〇年代  
のハーンが、当時のヨーロッパ人の中で、  
どれほど先行していたかがわかる。いや、  
それ以上に、当時のヨーロッパ人にとつ  
て「汚い言葉」であつたはずのクレオー  
ル語を採集し、黒人女性と同棲し、日本  
に来て、没落士族の日本女性と結婚、小  
泉八雲として帰化し、「ハーンは土人に  
なつた」のである。彼は真のエグゾット  
であつたのだろうか。

今回、改めて、ハーンの著作を再読した。  
作品に使つたテキストは、原語を読み  
こんだ。「怪談」の再読も、「日本の面影」

収録の、夢のように美しい盆踊りの描写  
も、それから、ハーンと作品について書  
かれた多くの文章を読んだ。

興味は尽きない。

彼はなぜそうだつたのだろうか、と考  
えない訳にはいかない。彼は、妻セツに、  
その「声」をもつて物語を「語らせ」、  
それに耳をそばだてる。彼がその「声」  
に聴いていたのはいつたい何だつたの  
か？と考えない訳にはいかない。そして  
彼はそれを記述したのだが、そこに「書  
かれた」ものは、いつたい何だつたの  
だろうかと思えない訳にはいかない。

しかし待てよ、と思う。お前は作曲家  
だろう！ 作品を、そんなに作者に引き  
寄せて読むのか！ しかし待てよ、と思  
う。自立した「作品」という概念の虚構  
も又、考えてみるべきでは、と。

十月三日、小泉八雲記念館を、小泉祥子さんに案内していただく。展示室に入った瞬間、ハーンの帽子と衣服が目飛び込む。横には、彼がアメリカからもつてきたポストンバックが。圧倒的な存在感。松江公演のコンサート会場は、記念館の直近。場の魔力に包まれた公演となつた。アイerland人と日本人による、全く異なつた四作品。CDにできると良いのだけれど。原語版と翻訳版の素敵な二枚組。